The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	土佐光則筆『源氏物語画帖』について
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1989, 6, p. 14-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67275
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

土佐光則筆『源氏物語画帖』について

伊井　春樹

一

土佐光則筆の『源氏物語画帖』（徳川美術館蔵）は、土佐派を代表する精密な彩色による画帖として早くから知られており、幾度かの美術展に出品され、一部は写真版でもしばしば紹介されている。五十四巻六十図、それに六十枚の詞書を添えた百二十枚からなり、色紙はタテ一五・三、ヨコ一四・一センチという小品ながら、その構図をはじめ、調度の一つ一つにいたるまでの細密な描写には、ただ精巧なできばえと感嘆するほかはない。題簽には「源氏物語絵詞」とするが、ここでは通称の『源氏物語画帖』の名を用いる。

光則（一五八三―一六三八）は光吉の子、あるいは弟子とも伝えられ、晩年に堺から京都に移り住み土佐派の再興をはかる。宮廷絵所預となり、法眼に叙せられた光起はその子供である。『扶桑画人伝』の光則の項に「源氏小扇面五十四枚」とするのは、『住吉家鑑定控』の、

小扇面形裏墨印有
源氏物語細画　五拾四枚
右土佐光則真筆無疑者也
天保三年四月六日　住吉内記弘定

とするのと一致するのだろうが、それには「墨印」があったとする。光則は自作にはこの印を押していたようで、徳川本の色紙のほか、バークコレクションやフリア美術館蔵の『白描源氏物語画帖』の紙背にも見い出されるという。この共通性によっても、徳川本が光則の手になることは疑いのないところで、六十人の貴紳による詞書とともに、土佐派の粋を示す評価の高い源氏物語色紙画帖の一つに数えられているのである。

この作品の成立時期については、当然のことながら光則の没した寛永十五年（一六三八）正月十六日以前となるが、さらに限定する資料としては六十人の詞書の筆者たちの存在で、その

共通して生存した年代と重ねると、ある程度は推定することが可能であろう。以下、巻なと筆者、その生存期間を列挙しておく。

1 桐壺　近衛殿尚嗣卿（一六二二－一六五三）
2 帚木一　伏見殿貞清親王（一五九五－一六五四）
3 帚木二　山科言総（一六〇三－一六六一）
4 空蟬　八条殿智忠親王（一六一九－一六六二）
5 夕顔　九条殿幸家公（一五八六－一六六五）
6 若紫一　二条康道公（一六〇七－一六六六）
7 若紫二　油小路隆貞卿（一六二二－一六九九）
8 末摘花　妙法院宮尭然法親王（一六〇二－一六六一）
9 紅葉賀　一乗院宮尊学法親王（一六〇八－一六六一）
10 花宴　聖護院宮道晃法親王（一六一二－一六七九）
11 葵　梶井宮慈胤法親王（一六一七－一六九九）
12 賢木　青蓮院尊純法親王（一五九一－一六五三）
13 花散里　曼殊院宮良尚法親王（一六二二－一六九三）
14 須磨一　大覚寺宮尊性法親王（一六〇二－一六五一）
15 須磨二　土御門泰広朝臣（一六一一－一六五二）
16 明石　実相院殿義尊大僧正（一六〇一－一六六一）
17 澪標　円満院殿常尊大僧正（不明－一六七一）
18 蓬生　広橋兼賢卿（一五九五－一六六九）
19 関屋　勧修寺経広卿（一六〇六－一六八八）
20 絵合　中院通村卿（一五八八－一六五三）
21 松風　柳原業光卿（一五九五－一六五四）
22 薄雲　西園寺実晴卿（一六〇一－一六六八）
23 朝顔　高倉永慶卿（一五九一－一六六三出家）
24 少女　大炊御門経孝卿（一六一三－一六八一）
25 玉鬘　姉小路公景卿（一六〇二－一六五一）
26 初音　清閑寺共綱卿（一六一二－一六七五）
27 胡蝶　中御門宣順卿（一六一三－一六六四）
28 蛍　園基音卿（一六〇四－一六五五）
29 常夏　中院通純卿（一六一二－一六五三）
30 篝火　藤谷為賢卿（一五九三－一六三五）
31 野分　清水谷実任卿（一五八七－一六六四）
32 行幸　平松時庸卿（一五九九－一六五四）
33 藤袴　持明院基定卿（一六〇七－一六六七）
34 真木柱　広橋綏光卿（一六一六－一六五四）
35 梅枝　日野弘資卿（一六一七－一六八七）
36 藤裏葉　正親町三条実豊卿（一六一九－一七〇三）
37 若菜上　水無瀬兼俊卿（一五九三－一六五六）
38 若菜下　竹屋光長朝臣（一五九六－一六五九）
39 柏木　四条隆術卿（一六一〇－一六四七）
40 横笛　飛鳥井雅章卿（一六一一－一六七九）
41 鈴虫　三条西実教卿（一六一九－一七〇一）
42 夕霧　岩倉具起卿（一六〇一－一六六〇）
43 御法　白川雅陳王（一五九二－一六六三）

44幻　野宮定逸卿（一六一〇―一六五八）
45匂宮　高倉永将卿（一六一五―一六八一）
46紅梅　柳原資行卿（一六二〇―一六七九）
47竹河　烏丸資慶卿（一六二二―一六六九）
48橋姫　千草有能卿（一六一五―一六八七）
49椎本一　庭田雅純朝臣（一六二七―一六六三）
50椎本二　藪嗣孝卿（一六一九―一六八二）
51総角　白川雅喬王（一六二〇―一六八八）
52早蕨　水無瀬氏信卿（一六一九―一六九〇）
53宿木一　高辻良長（豊長）卿（一六二五―一七〇二）
54宿木二　甘露寺嗣長卿（一六一一―一六五〇）
55東屋　園基福卿（一六二二―一六九九）
56浮舟　六条有和卿（一六二三―一六八六）
57蜻蛉一　富小路頼直卿（一六一三―一六五八）
58蜻蛉二　清水谷光栄朝臣（一六二〇―一六九一）
59手習　東園基賢卿（一六二六―一六八六出家）
60夢浮橋　裏松資清卿（一六二六―一六六七）

これによって、いずれもほぼ江戸初期の人物と知られるのだが、そのうちでも宿木巻を担当した甘露寺嗣長は、もっとも早い慶安三年（一六五〇）十月四日に三十九歳で没しており、一度期に詞書を書写したとするとそれ以前にはできあがっていなければならない。これを下限としても筆者相互に矛盾はなく、その年高辻良長（宿木）が二十六歳、裏松資清（夢浮橋）が二十五歳、庭田雅純（椎本）が二十四歳といったところで、染筆できなかった若さではない。逆に年長者では九条幸家（夕顔）の六十五歳を筆頭に、清水谷実任（野分）の六十四歳、中院通村（絵合）の六十三歳等、後の筆者はすべてこの間に位置する。嗣長が没した時にもっとも若いのが雅純の二十四歳、これを二十歳の折の書写とすると正保四年（一六四七）、さらに十代後半までさかのぼらせることができるにしても、それほど隔てるわけにはいかず、ほぼこの前後が妥当なところであろう。このようにして、六十人の貴顕の生没年から、詞書の出現は慶安三年を下限とし、上限は正保二、三年までといった見通しを得ることになる。

ところで、ここで絵師光則と重ねると、きわめて困った問題が生じてくる。すでに述べたように光則は五十六歳の寛永十五年没、するとその年雅純はわずかに十二歳、続いて資清は十三歳、良清は十四歳と、幾人かの少年たちが筆者に加わっていたことになってくる。一人だけであれば筆者極めの誤りということも考えられようが、このように複数となるとその可能性はない。もっとも十二、三歳の筆者が存在していたとしても不思議ではないにしても、筆跡を見る限りそのような幼さは認められない。それに右で考証した正保から慶安にかけての四、五年の間に詞書ができあがったとする推定から、下限は光則の没年までひき上げると、すべての筆者が十年余り若年化してくる。そうなると、八条宮智忠（空蟬）二十歳、油小路隆貞（若紫）十

七歳、聖護院道晃（花宴）二十七歳、梶井宮慈胤（葵）二十二歳、曼殊院良尚（花散里）十七歳などと、きわめて平均年齢が低くなってくる。ちなみにこれで数えると、十代が十六人、二十代が十八人となり、全体六十人のうち半数以上が二十代以下という結果となり、このようなことはまず考えられない。しかも、これは光則の没年を基準にしてのことで、もし五十歳の折の作品とすると、雅純などは六歳になってしまい、もはや問題外となる。

このようにたどってくると、絵の成立と詞書の写された時期とは十年余のずれが生じてき、それを一つにするのは困難というほかはない。詞書の料紙などからも、十数年にわたって増補されていったという体裁ではなく、やはりある時期に一回的に出現したと考えるべきであろう。すると、光則が作製していた色紙画に、没して後六十人の公卿たちの分担によって詞書が添えられ、今日見るように一揃いとなったということになる。

二

徳川本光則画帖は、詞書と絵とがきわめて密接な関係にあり、そこに示された本文内容がほぼ忠実に絵画化される。そういった意味では光則の絵を見ながら後人が該当する本文を抜き出したといった体ではなく、二つは成立当初からセットになっていたに違いない。あるいは、光則が色紙画を描いた折、すでに詞書も添えられていたが、高貴なもとでの贈答などに用いる必要上、あらためて人々が染筆したといったことも想像できなくもない。

この画帖に描かれた六十の場面については、すでに秋山光和氏により「源氏物語絵詞所収場面一覧と作品例との対照表」（日本の美術「源氏絵」昭和五十一年、至文堂）とする中に取り込まれているし、田口栄一氏も「源氏絵帖別場面一覧表」（一九八二年七月、インディアナ大学における源氏学会配付資料）で他の画帖とともに比較され、さらにその後の成果も踏まえた「源氏絵帖別場面一覧」（『豪華「源氏絵」の世界　源氏物語』所収、一九八八年、学研）にも詳細に述べられている。ただ、そこでは他の画帖の場面との比較のため徳川本だけに即した内容ではなく、また一部漏れている巻もあるため、ここに私なりにまとめておく。なお、右の資料を参考にしたほか、私自身の作成した「源氏物語場面一覧表」（拙編『源氏綱目付源氏絵詞』所収、昭和五十九年、桜楓社）も用いた。さらに、絵詞も漢字かなまじりにして示しておく。

1桐壺

Web公開に際し、本ページ以降の翻刻は省略しました

○源氏元服の儀式。清涼殿での儀式に赴く源氏、殿舎の簾子

を通る。

2帚木一

[redacted]

○源氏、頭中将と女性談議、そこに左馬頭・藤式部丞が訪れる。室内では、源氏と頭中将が手紙を中にして見てるいる場面。

3帚木二

[redacted]

○空蟬との一夜を過ごし、障子口まで見送る。女房中将が簀子で出迎える。

4空蟬

[redacted]

○源氏、小君の手引きで、空蟬と軒端荻の臥す部屋に忍び入る。

5夕顔

[redacted]

○源氏、六条御息所の邸に泊った翌朝、霧深い庭を見ながら簀子で侍女と歌を詠み交わす。部屋には御息所、庭には朝顔を手折る女童の姿。

6若紫一

[redacted]

○僧都の庵室に泊り、夜中に眠れないまま扇を鳴らして人を呼ぶ。

7若紫二

[redacted]

○若紫邸を訪れた源氏は、若紫を引き寄せて休ませようとする。乳母の右近、女房、女童などを描く。

8末摘花

[redacted]

○源氏、常陸宮邸を訪れ格子を叩くと、女房が灯をさしかけ

て迎え入れる。庭の松には雪が降り積もる。

9 紅葉賀

[redacted]

○元旦に朝拝に内参する源氏が、西の対の若紫のもとに訪れる。部屋には若紫と女房たち、さらに雛道具が置かれる。

10 花宴

[redacted]

○右大臣邸での藤の宴で、朧月夜と再会し、その手を捉えて歌を詠み交わす。庭には、松に這う藤と桜。

11 葵

[redacted]

○車争いの場面。斎院御禊の日、六条御息所の車は、葵上の一行に押し退けられる。

12 賢木

[redacted]

[redacted]

○秋の夕月夜、源氏は六条御息所を野の宮に訪れ、手折った榊を御簾の中に差し入れて歌を詠み交わす。小柴垣と黒木の鳥居、乗ってきた牛車と供人たち。

13 花散里

[redacted]

○源氏、麗景殿女御邸で郭公を聞き、語り合う。空に二十の月と郭公。

14 須磨一

[redacted]

○左大臣邸で、春の曙に中納言の君と別れを惜しむ。勾欄から月を眺める源氏の姿。

15 須磨

[redacted]

○源氏琴を弾き、惟光は笛、良清が歌を歌う。須磨でのわび住い。

16 明石

[redacted]

[redacted]

○明石入道邸で、源氏琴を奏で、入道は琵琶を弾く。

17澪標

[redacted]

○病気で出家した六条御息所を見舞い、几帳の隙間から斎宮をかいま見る。病床に臥した御息所と対面する源氏、几帳を隔てた奥に斎宮を配する。

18蓬生

[redacted]

○源氏、惟光に常陸宮邸の様子をうかがわせる。建物の中には老女房か、横になっている姿。庭には草が生い茂る。

19関屋

[redacted]

○源氏、石山詣での途次、秋の逢坂の関で空蟬に出会う。道を避け、杉の木立に車をかきおろした一行。

20絵合

[redacted]

○藤壺中宮のもとでの絵合。中宮を中にし、左右に女房たちが分かれる。

21松風

[redacted]

○明石上の大堰のもとから帰る源氏に、乳母が姫君を抱いて見せる。明石上は奥の部屋でうつ伏せになっている。

22薄雲

[redacted]

○斎宮女御二条院に退出、秋雨の庭を眺める。源氏、几帳を隔てて語る。

23朝顔

[redacted]

○帰邸した源氏、朝霧の庭を眺め、咲き残る朝顔を折って歌を付し、朝顔斎院に贈る。庭には朝顔を折る童女。

24少女

○夕霧、五節に兄を介して消息、それを父の惟光に見とがめられ、逃げ出す兄と顔を赤くする妹の五節。

25玉鬘

○六条院に引き取られた玉鬘のもとを源氏が訪れる。右近、出迎えて、妻戸を開ける。

26初音

○源氏、明石上のもとを訪れ、反故を見て自らも書きつける。褥に置かれた琴や香炉。

27胡蝶

○玉鬘のもとに届けられた文を見て、源氏はその送り主を右近に尋ねる。

28蛍

○蛍宮から玉鬘へ菖蒲の根に結びつけた文が届けられる。源氏と玉鬘の間には、菖蒲に結び付けられた文が置かれる。

29常夏

○源氏、玉鬘のもとで、庭に咲き乱れる撫子を眺める。他の殿上人たちも同道する。

30篝火

○源氏、柏木や夕霧などを玉鬘の方に招き、琴などを合奏する。庭には篝火が焚かれる。

31野分

○源氏、玉鬘とたわむれる。夕霧理、御簾の間からその姿をかいま見て驚く。

32行幸

○冷泉帝の大原野の行幸の翌日、源氏は玉鬘に白い色紙による消息をする。それを読む玉鬘と女房たち。

33藤袴

[redacted]

○玉鬘のもとに届けられた蛍宮の消息。霜の置いた笹に結ぶ。

34真木柱

[redacted]

○思はずに井手のなか道へだつともいはでぞ恋ふる山吹の花

出仕して六条院からいなくなった玉鬘を、源氏は慕っての思いに耽ける。庭には山吹の花が咲く。

35梅枝

[redacted]

○朝顔斎院から紺と白の瑠璃の壺を、五葉松と梅の枝に付けて贈られ、その返事を梅の枝に結んで贈る。庭で梅を手折る童女。

36藤裏葉

[redacted]

○夕霧からの雲居雁に届けられた後朝の文を、父の内大臣が読む。

37若菜上

[redacted]

○女三宮降嫁後、紫上楽しまず、硯を引き寄せて歌を詠み、源氏は当惑して寄り臥す。

38若菜下

[redacted]

○小侍従、源氏が対に渡っていない暇に、柏木の文を女三宮に密かに見せる。

39柏木

[redacted]

○夕霧、一条宮邸を訪れ、落葉宮の母御息所と語り、悲しみ

[redacted]

40横笛

[redacted]

○朱雀院のもとから女三宮へ筍に添えて文を届ける。涙を流しながら読んでいるところに、源氏が訪れる。

41鈴虫

[redacted]

○仲秋の夜、鈴虫の宴で琴などが合奏される。庭には、女郎花や薄が描かれる。

42夕霧

[redacted]

○小野を訪れた夕霧は、落葉宮に思いを訴え、逃れようとする女宮の裾を捉える。

43御法

[redacted]

[redacted]

○紫上、幼い匂宮に庭の紅梅を、自分の死後世話をするよう求める。

44幻

[redacted]

○二条院の桜を見て、亡き紫上を偲ぶ源氏。匂宮のことばに、心慰められる。

45匂宮

[redacted]

○賭弓の後、夕霧、六条院に親王たちを招く。雪の散る中を連れて参集する。

46紅梅

[redacted]

○若君、文を紅梅の枝に結び、匂宮に届ける。

47竹河

[redacted]

○薫、玉鬘邸で女房たちと歌の贈答。庭に紅梅が咲く。

48橋姫

○宇治八宮邸を訪れた薫は、姫君たちと物語をし、弁の御許が応対する。

49椎本一

○八宮の没後、薫は仏間で生前の姿を偲んで歌を詠む。

50椎本

○山の阿闍梨から、沢の芹や蕨などが届けられ、姫君たちは亡き父を偲んで歌を詠む。

51総角

○匂宮と薫、遣水に映る秋の月を眺めながら、宇治の姫君た

52早蕨

○京へ迎えられる中の君は、宇治を離れるかと思うと姉の大君が偲ばれる。その姿をかいま見ようとする薫。

53宿木一

○薫は、大君を思慕しながらも失意の思いで庭の朝顔を手折り、中君のもとを訪れる。

54宿木二

○宇治から帰った薫から中君に消息。それを見て、匂宮は嫉妬の思いながらも返しをするよう勧める。

55東屋

○匂宮が明石中宮の見舞に参内しようとしている折、若君が

這い出て御簾からのぞき見ているのに気づき、そばに寄る。

56浮舟

[redacted]

○宇治の浮舟から中君に新年の歌をよこしてくる。匂宮見てあやしむ。

57蜻蛉一

[redacted]

○薫、かいま見た女一宮の姿を恋しく思いながら、北方の女二宮に同じ「羅の単衣」を自ら着せる。

58蜻蛉二

[redacted]

○薫、弁の御許と語る。弁は唐衣を脱ぎ、手習いをしている様子。

59手習

[redacted]

○浮舟、少将の尼と碁を打つ。

60夢浮橋

[redacted]

○薫、横川の僧都から浮舟入水とその後の様子を聞き、小君に文を託そうとする。

以上が、色紙絵の詞書と場面一覧で、これによってその内容の一端が知られよう。桐壺巻など、元服では源氏が儀式の場に赴く姿を描くなど、あらたな場面を創造しようとする試みもなされはするものの、全体としては土佐派で培われた構図の範疇を踏み外しているわけではない。光則の白描画帖では、同じ場面を取り上げるにしても、また別の視点から描くなど、彼自身も多様な摂取の方法をとる。なお、光起にも源氏物語画帖が存するが、その構図の一部は、明らかにこの光則画の影響が認められる。

本稿は、『徳川本源氏物語画帖』（フランクリンミント画廊）の解題として書いたものである。これは、十二帖の折本に仕立て、原寸大で再現し、彩色にいたるまで完全複製を目指した内容となっている。

web公開に際し、画像は省略しました

web公開に際し、画像は省略しました

土佐光則筆『源氏物語画帖』松風巻